

■ フォト・エッセイ ■

マリアッチの空に ——ガザで夢見る愛の逃避行——

写真・文
大月啓介
Kesuke Otsuki



新婚さんの車と、武装組織のパレード

パレスチナ自治区・ガザ。約三六〇平方キロの土地に、一五〇万人もの人々がひしめきあっている。今もイスラエルによる封鎖に苦しむ「大きな監獄」だ。ここはパレスチナの中でもイスラム色が非常に強い土地柄で、その影響はもちろん男性と女性の関係にも強く見られる。

あるとき、私はガザ市に住む友人Rと共に外食をした後、夜道を二人歩いていた。Rは荒っぽい人々の多いガザにおいては珍しく物静かなインテリだ。彼はイスラエルに対する武装闘争には批判的で、その無意味さを度々口にしてきた。その時も歩きながら、紛争が続く先の見えないガザでの人生への苛立ちを私に語っていた。しかし不意に話題を変えると、彼は聞いてきた。「お前はどうかやって結婚相手を見つけたのか?」。

「なぜにそんなことを知りたいのか」と逆に聞き返すと、「俺は、ここパレスチナでは、結婚相手を見つけないかもしれない」とのたまう。「パレスチナの女は、愛ではなくて、結婚自体を目的にしてるんだ」と。

保守的なガザでは、親同士のアレンジによる親戚間の結婚が一般的で、彼のような意見は非常に珍しい。それなりに「開けた」考えを持ったパレスチナの友人からは、そのような意見を何度か聞いたことはあったので、「そんなものかなあ」と黙って聞いていた。しかしRは大学時代を一言も女性



ガザ南部・ラファ難民キャンプ



ラファ難民キャンプにて。じゅうたんを干す家庭



ガザ市のおもちゃ屋。ガザでは、銃のおもちゃはとても人気がある

と話さずに終えてしまったという奥手だ。その彼がどのように「パレスチナ女性の結婚観」を形成したのか、少々怪しい。が、そんな私の疑問をよそに、彼は続ける。

「それに、どう思う？ 一度も会ったこともないような相手と婚約して、その後に関係を作っていくんだぞ。まるでギャンブルじゃないか」。

日々生き抜くこと自体がギャンブルとも言えるこの地で、そんな野暮を言う彼は、かなりの変わり者だ。それに、ガザを出たことがない彼が、一体どこでそんな考え方を仕入れたのだろうか…。いや、このご時世、イスラエル軍による封鎖と軍事侵攻に苦しむガザにすら、空からは衛星放送の電波が、そして地上ではインターネットのケーブルを通して、「外界」の情報は絶えず流れ込んでくるのだった。

「お見合いがギャンブルか…。でも、それはそれでいいんじゃないかな、それも運命という事で。ひよっとして相性バツチりかもしれないし、恋愛結婚でもギャンブルには変わりはない」と私は適当に答えた。

「でも俺は、しっかりと自分たちで愛を確かめ合ってから、一緒になりたいんだ」。なかなか日本では耳にすることのないようなイカした言葉が、控えめなRの口から飛び出した。ごもつともな言い分ではあるけれど、残念ながら家族の理解は得られずに親戚との結婚を勧められ、Rは大いに悩んでいるのであった。



ガザ南部・ラファ難民キャンプにて。パレスチナの伝統的なドレスを着た少女



女性の装飾品を売る商店にて



殉職者の姿を描いたポスター

「そもそもここでは、自分にふさわしい女性と出会うチャンスがないんだぞ」。確かに。大学生であれば、まだかろうじてキヤンパス内での出会いに賭けることもできるだろう。しかし彼はそのチャンスも全く生かさずに、数年前に大学を卒業している。現在、Rは学校の教師を二つ掛け持ちしているが、どちらの学校にも女性の教師はいないと言う。しかも切ないことに、どちらも男子校だ。更に、街中での出会い、いわゆるナンパなど、ガザの社会ではあり得ない。「出会いを求める男」にとっては、確かにあんまりな環境ではある。

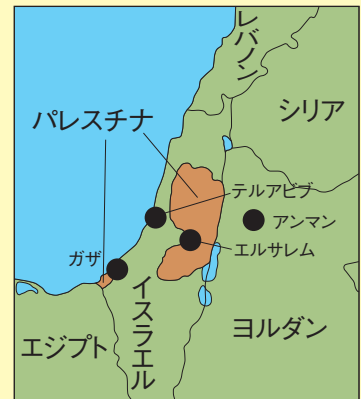
で、「真の愛」を求める彼がたどり着いた人生の打開策は、どういうわけか、「メキシコへ行く」であった。彼の描くメキシコのイメージ。街中にロマンスが溢れかえっている。老いも若きも、男も女も、いつも踊っている、歌っている。どこで聞いたのか、マリアッチという音楽があるらしい。しかも物価がガザより安い。そして何よりもメキシコは、「自由とチャンスの国」アメリカへの密入国の前庭、である…。

「…アメリカ入り、狙うの？ 危ないよ。撃たれるぞ」。ここガザでも、イスラエルの築いた境界のフェンスに近づくパレスチナ人は、容赦なく狙撃されることになる。その恐ろしさは、ガザの人間であるRも、もちろん承知のはずだが。

「メキシコにしばらく住んで落ち着いたら、アメリカ入りに挑戦するつもりだ。ア



登校する女学生



ガザ市にて。正装をした小さなカップル



ガザの海

ラーが守ってくれるよ」。メキシコの空にもアラールはいるだろうか。

別れ際、彼が「やることがあるから、まだ今日は寝れないんだよね」と言う。「何するの」と聞くと、「明日は朝から、ドイツ語のレッスンがあるから、帰ったら予習しなくては」とニヤリ。「メキシコで使われているのはドイツ語ではなくて、スペイン語なんだけど」と、危うくヤボなことを言いそうになる。もう半年ほど習っているというので、言いづらいついということもあるが、この際だから、このままメキシコに乗り込んで、現地で衝撃の事実を知るというのも、また一興だろう。きつと、彼がオヤジになってから、子供や孫に聞かせるかなりいいネタになるはずだ。たぶん。

多くのパレスチナの若者にとって、湾岸アラブ諸国への出稼ぎを除けば、「外国へ行く」＝「欧米に行く」ということだ。その中であつて、Rの選択「ここ、恋愛ご法度のガザから、歌って踊れる国、ロマンス溢れる国・メキシコ」への挑戦。「欧米で学位を取り、帰国して良い職に就き、よい暮らしを」というパレスチナにおける立身出世の王道に背を向けての、直の「欲望の地」へのダイブ。

地味な印象に似合わず、なかなかの破天荒さではないか。気に入った。何を考えているのかは正直言ってよくは分からないが、とにかく応援するぞ、陰ながら。

(おおつき けいすけ／ジャーナリスト)